

# 兵庫県日高町立府中小学校における社会科カリキュラム編成

— 1978年度版カリキュラムを手がかりに —

Organization of the social studies curriculum in Hyogo Prefecture Hidaka Municipal Fuchu Elementary School

— The case of 1978 version curriculum —

峯 岸 由 治 \*

## Abstract

The purpose of this study is to obtain an indication of the Community-based social studies curriculum development. To that end, we will elucidate the social studies curriculum, which is organized in Hyogo Prefecture Hidaka Municipal Fuchu elementary school (at the time). In the curriculum, the historical facts and the labor of the community had been selected as the learning contents. The learning contents, had been arranged to the world from the living area. Also, historical experience and social experience of people in the community, professional knowledge, historical and social record had been organized. This curriculum is intended to help children to develop a social recognition and a way of life. To that end, it is tried to learn the historical experience and the social experience of people in the community. In addition, people in the community are participating in the organization and implementation of the curriculum, on their own initiative.

キーワード：社会科カリキュラム、地域の歴史、地域の生産活動

## 1. はじめに

カリキュラム研究は、「学校では、何を、どのような形で、どのような順序で教えるのか」を考察するものである<sup>1)</sup>。日本におけるカリキュラム研究は、戦後の一時期を除いて活発であったとは言い難い現状がある。それは、「日本では中央集権的なナショナル・カリキュラム（学習指導要領のこと―筆者註）の制度がながく続き、しかも法的な拘束力を持ったカリキュラムであった」からである<sup>2)</sup>。したがって、社会科教育におけるカリキュラム研究も、「実践した個別の学校や子ども達は何を教え学んだかよりも、国や地方などより一般的に用いられる計画」を対象に、「カリキュラム開発よりも分析する」研究が多くなされてきたのである<sup>3)</sup>。しかし、1998年版学習指導要領以降、学習指導要領は「大綱的基準」としての性格付けがなされ、「大綱的基準としての学習指導要領を踏まえた上で、学校・地域・子

どもに基づいたカリキュラム開発をすることが要請」されている<sup>4)</sup>。そこで、本小論では、兵庫県日高町立府中小学校（当時。以下、「府中小」と略す。）で、1978年に編成された『父母・祖父母とつくる社会科カリキュラム』を取り上げ、カリキュラム編成の方法原理を解明し、カリキュラム開発の示唆を得たいと考える<sup>5)</sup>。本カリキュラムを取り上げる理由は、以下のとおりである。

第一に、本カリキュラムが「実施したカリキュラム」だからである。府中小カリキュラムは、1973年度から始まった校内研修「地域と結ぶ社会科の授業」、「祖父母の歴史に学ぶ会」といった教育活動を集大成する形で編成されている<sup>6)</sup>。そして、授業実践を通して検討が加えられ1979年、1980年には、それぞれカリキュラムが改訂されている<sup>7)</sup>。すなわち、府中小では授業研究を基礎にカリキュラム開発がなされ、授業研究を通してカリキュラム評価が行われ、カリキュラムの修正・改善が図られているの

\* Yoshiharu MINEGISHI 教育学部教授

である<sup>8)</sup>。これまで、社会科教育におけるカリキュラム研究の動向は、「意図したカリキュラム」を対象に、分析研究が主流となっていた。しかし、カリキュラム開発を行うためには、「『今』行われている日本の教師や学校が開発しているカリキュラムそれ自体やその開発過程を検討する研究が必要」である<sup>9)</sup>。府中小カリキュラムは1978年から1980年に編成されたカリキュラムではあるが、本カリキュラムを検討することによって、府中小の教師が児童に何を教えようとしたのか、どのようにカリキュラムを編成したのか等の示唆を得ることができると考える。

第二に、本カリキュラムが、地域に根ざしたカリキュラムだからである。大綱的基準としての学習指導要領は、各学校における社会科指導計画作成について、次のような配慮事項を示している<sup>10)</sup>。

「地域の実態を生かし、児童が興味・関心をもって学習に取り組めるようにする」

すなわち、「地域にある素材を教材化すること、地域に学習活動の場を設けること、地域の人材を積極的に活用することなどに配慮」した指導計画作成が要請されているのである<sup>11)</sup>。府中小カリキュラムには、祖父母、父母の話や記録、地域見学場所等が、多数明記されている。したがって、本カリキュラムを検討することによって、府中小の教師がどのような考えのもとに祖父母、父母の話や記録、地域見学場所等を選択し配列したのか、示唆を得ることができると考える。

府中小カリキュラムに関する先行研究としては、以下のものがある。

①府中小学校調査団調査報告書「Ⅲ 父母・祖父母とつくる社会科カリキュラム」

②佐藤年明「社会科カリキュラムの検討」

①は、日本教育学会、教育科学研究会府中小学校調査団報告の一部である<sup>12)</sup>。この論文には、同校で進められた地域の題材を扱った社会科授業の取り組み、社会科カリキュラム編成の経緯、社会科カリキュラムの構成、社会科カリキュラムのもとでの授業実践の紹介等が行われている。そして、こうした府中小カリキュラムが、「①地域に根ざすことを社会科全体編成原理として具体化した点において、②カリキュラムの基本思想を祖父母・父母の願いに添って地域の展望をさぐる点において、③また、祖父母・父母の社会科実践の積極的

協力と参加を大量に、かつ、内実をともなって組織している点において、70年代以降の地域に根ざす教育実践の先進を切り開くものであった」と評価している<sup>13)</sup>。しかし、このよう評価を受けるカリキュラムはどのように編成すればいいのかといったカリキュラム編成の背後にある考え方が解明されていないところに研究の限界がある。

②は、①の府中小社会科プランに対する評価の妥当性を検討した後、「カリキュラム全体を支える基本理念を紹介し、「カリキュラム構成の論理について」検討を加えたものである<sup>14)</sup>。この論文では、「府中小プラン」の特徴を「小学校社会科カリキュラム全体の中で、可能な限り地域を対象とした」こと、「父母・祖父母の話を素材としている」こと、「子どもたちの認識を広く豊かに発展させるための、教材配列上の配慮がなされている」ことであるとしている<sup>15)</sup>。しかし、こうした特徴がなぜ見られるのか、どのような配慮がなされているのか解明されていないところに研究の限界がある。

そこで、次の研究方法を取る。第一に、府中小カリキュラムがどのようなものなのか全体像を明らかにする。第二に、府中小カリキュラムはどのような内容が、どのように配列されているのか、特色となっている地域教材はどのような資料や見学場所が選択されているのかを解明する。その際、府中小カリキュラムは法的拘束力を持った学習指導要領のもとで編成されていることを踏まえて、内容と配列、選択された地域教材に見られる特徴を考察する。第三に、どのような考え方でカリキュラムは編成されたのか、どのようにして地域住民の参加を可能としたのかといった府中小カリキュラムに内在する編成理論を解明する。

## 2. 地域の人々の経験に学ぶ社会科カリキュラムの概要

府中小「父母・祖父母とつくる社会科カリキュラム」の最初の編成は、1978年度に行われている。カリキュラムは、1年生から6年生までの学年ごとに学期、月、単元名、ねらい、小単元名、到達目標、祖父母の話・記録、父母の話・記録、地域資料、見学場所、その他の資料という枠組みで編成されている。「表1 父母・祖父母とつくる社会科カリキュラム(3年)」が実際のカリキュラムである<sup>16)</sup>。例えば、3年生のカリキュラムには、1学期は「わた



したちの日高町」という単元が、45時間扱いで設定されている。本単元のねらいは、「自分たちの校区や、町の特徴ある地形、土地利用、及び集落の分布を取り上げ、人々の生活と自然、環境との関係を理解させる」ことである。

本単元には、4・5月に、小単元「府中小学校のようすと絵地図作り」27時間扱いが設定されている。本小単元の到達目標は、「校区の土地のようすや、その利用のしかたがわかる」「方位や地図記号をつかみ<sup>(ママ)</sup>、絵地図に表す」「すすんで調べ、記録したり考えたりする」という3つである。この小単元の学習に関連する「祖父母の話・記録」として、次の方々のお名前と話題が明記されている。

「・芝の大木 藤原操（西芝）

・八代川ショートカット 上野定雄（西芝）

・土居の堤防 稲葉柳蔵

・出石鉄道・上ノ郷橋・上ノ郷のお宮さん 戸田重太郎（府市場）・上倉信夫（西芝）・奥仲朋行（上ノ郷）」

また、「父母の話・記録」として、次の方々のお名前と話題が明記されている。

「・新しくできた虹の街 中野佐太郎（虹の街）

・たばこ作りのこと 船津浜夫（堀）」

「地域資料」として、次のものが明記されている。

「『国府村史』・『日高町史』・『古地図』・『円山川（神戸新聞編）』・国府地図・日高町地図・但馬大地図・兵庫県地図・昨年度3年生成成絵地図・上ノ郷気多神社の碑文」

「見学場所」として、次の場所が明記されている。

「竹貫・虹の街・国府テラス・上石・西芝・池上・野々庄・堀・府中新・府市場・土居・松岡・上ノ郷・水生城跡・上ノ郷頼光寺裏山もみじ公園」

「その他の資料」として、次のものが明記されている。

「『地図あそび（岩崎書店）』・『川（福音館書店）』・『但馬のこども（4）かわっていくぼくの町』」

また、6・7月に、小単元「日高町のようすと絵地図作り」18時間扱いが設定されている。本小単元の到達目標は、「日高町の土地のようすや、その利用のしかたがわかる」「方位や地図記号をつかみ<sup>(ママ)</sup>、絵地図に表す」「県の地形の特徴と日高町の地理的位置をつかむ」「すすんで調べ、記録したり考えたりする」という4つである。この小単元の学習に関連する「祖父母の話・記録」「父母の話・

記録」「見学場所」「その他の資料」は、記述がない。「地域資料」として、次のものが明記されている。

「郷土学習資料集『ひだか』（小学校編・中学校編）・『日高広報』・『兵庫のふるさと散歩（但馬編）』・『産業統計資料』」

以上見てきたように、3年生では、日高町の地理的歴史的政治経済的内容が配列されている。そして、学習内容に関連する父母、祖父母の歴史体験や生活経験、専門的知見、地域にある歴史的社会的記録、歴史的社会的に意味づけられた場所、関連する統計や読み物等が組織されたものとなっているのである。

### 3. 地域の人々の経験に学ぶ社会科カリキュラムの構成

#### (1) カリキュラムに見られる内容と配列

1年生は、「がっこう」（30時間）「わたしたちのうち」（30時間）「きんじょ」（20時間）という単元が配列されている<sup>17)</sup>。「がっこう」は、「学校生活には家庭生活とちがった集団生活のあることに気づかせ、集団生活へ参加できるようにさせる」「学校全体のあらましを知り、学校にある施設や道具・そこで働く人々の仕事のようすを理解させる」「学校には、みんなの健康を守るための施設や道具があり、行事が計画され、そこでは健康を守るために働いている人のあることを気づかせる」内容となっている。「わたしたちのうち」は、「家族の人々がそれぞれ仕事を分担し合い、家庭生活を支えていることに目を向けさせ、家族の一員としての立場や、家庭と社会とのつながりについて理解させる」内容となっている。「きんじょ」は、「（学校の周りの様子を一筆者註）簡単な模型や絵地図に表す」「（登下校で使う一筆者註）道路によって状況や交通量が違うこと、安全施設や交通規制のちがいのあることをとらえさせる」「（近所の様子は一筆者註）人々のねがいで変わっていくことやみんなで共同しているものあることを理解させる」内容となっている。

2年生は、「田やはたけではたらく人びと」（22時間）「山やうみではたらく人びと」（10時間）「みせではたらく人びと」（12時間）「こうばではたらく人びと」（16時間）「のりものやゆうびんのしごとをする人びと」（16時間）という単元が配列されている。「田やはたけではたらく人びと」は、「自然を生かす工夫や災害を防ぐ努力を具体的に理解させる」「い



ねかり、だっこくを中心に畑作物のようすを春、夏とくらべさせる」内容となっている。「山やうみではたらく人びと」は、「周囲の土地の様子や、仕事の特色を理解し、農業と比較して考えさせる」内容となっている。「みせではたらく人びと」は、「販売の上での工夫や、店の特徴を理解し、自分たちの生活との関係について考えさせる」内容となっている。「こうばではたらく人びと」は、「身のまわりのほとんどの品物が工場に関連していることをわからせる」「工場ではたらく人たちのようすやどのようにして物が作られていくのかをわからせる」内容となっている。「のりものやゆうびんのしごとをする人びと」は、「自分たちのくらしとの関係を理解させ、仕事の特色について考えさせる」内容となっている。

3年生は、「わたしたちの日高町」(45時間)「町民のくらし」(25時間)「住みよい町へ」(20時間)「町役場と町議会」(10時間)「日高町のうつりかわり」(20時間)という単元が配列されている。「わたしたちの日高町」は、「自分たちの校区や、町の特徴ある地形、土地利用、および集落の分布を取り上げ、人々の生活と自然、環境との関係を理解させる」内容となっている。「町民のくらし」は、「自分たちの町における重要な生産活動と商店街のはたらきを理解させ、それらを通して他地域との結びつきについて考えさせる」内容となっている。「住みよい町へ」は、「町の人々の健康を守ったり、災害に対する活動がいろいろな形で、しかも組織的に行われている様子を理解させ、地域の生活では、住民全体の福祉が大切なことを考えさせる」内容となっている。「町役場と町議会」は、「くらしを向上させ、豊かにしたいという願いは、町民の代表によって計画され、具体的に決められて、町役場を中心にして実行されることを理解する」内容となっている。「日高町のうつりかわり」は、「町の様子と人々の生活には今昔の違い、歴史的移り変わりがみられることを理解させ、その間の先人の努力について、関心を深めさせる」内容となっている。

4年生は、「わたしたちの町」(20時間)「わたしたちの県」(14時間)「さまざまな土地のくらし」(11時間)「郷土をひらく」(45時間)「交通の発達」(25時間)「くらしを守る」(11時間)という単元が配列されている。「わたしたちの町」は、「私たちの自然と、くらしを知り、周囲の市町や県との関係を理解

させる」内容となっている。「わたしたちの県」は、「県内の自然条件の違い、人口分布、産業分布の特徴を理解させる」内容となっている。「さまざまな土地のくらし」は、「それぞれの土地・地域で生産を進展させ生活を切り開く努力がなされていることを自分たちの生活をふまえて学び、自分たちの地域をどうするのか考えさせる」内容となっている。「郷土をひらく」は、「先人のやりとげてきた開発の歴史や、現在進められている開発を知り、生産を高め、暮らしを守る民衆の願いと運動を考える」内容となっている。「交通の発達」は、「交通が今日のように発達してきた歴史的背景を知り、先人の様々な努力のあったことを理解させる」内容となっている。「くらしを守る」は、「公害を防止する努力が続けられていることを知り、これからの但馬や兵庫県について考えさせる」内容となっている。

5年生は、「わたしたちの生活をささえる国土と産業」(20時間)「日本人の食生活と農業畜産業」(45時間)「日本の森林と海洋」(12時間)「日本の工業生産とそのつながり」(28時間)「産業の発展とわたしたちのくらし」(30時間)という単元が配列されている。「わたしたちの生活をささえる国土と産業」は、「労働生産を通じて営まれる国民生活は、各種の産業を生み出し、それらは互いに深い関係を持っていることや、わが国の地理的環境の特色について理解させる」内容となっている。「日本人の食生活と農業畜産業」は、「日本の農業の特色を、土地利用、生産技術の面から理解させ、農業生産と国民生活の関係や農民の願いを、その歴史的変遷の中で考えさせる」内容となっている。「日本の森林と海洋」は、「日本の森林・水産資源の現状を知り、それに伴う問題点に気づかせ、山村・漁村の人々の努力や工夫を知り、願いを理解させる」内容となっている。「日本の工業生産とそのつながり」は、「国民生活や産業全体の立場から工業生産の意味を考えさせるとともに、わが国の工業の現状や特色、その歴史的背景について理解させる」内容となっている。「産業の発展とわたしたちのくらし」は、「産業の発展や国土の開発と国民の願いとの関係を考えさせ、政治の働きや国民全体のくらしに対する関心を深めさせる」内容となっている。

6年生は、「日本のあゆみ」(90時間)「生活と政治」(15時間)「世界の土地と人」(6時間)「平和への努力」(11時間)という単元が配列されている。

「日本のあゆみ」は、「人々の生きるための願いと、その実現を歴史上の重大な出来事、各時代の為政者と民衆の動きを中心に現代の国家社会が出来上がったことを理解させる」内容となっている。「生活と政治」は、「日常生活と政治のつながりを理解させる」「政治に対する正しい認識を育てる」内容となっている。「世界の土地と人」は、「世界の自然環境の概略や人々がいろいろな気候条件のもとで生活を営んでいることを理解させる」内容となっている。「平和への努力」は、「国々の結びつきがどのような原因によって変化していくのか、平和的な解決のさまざまなげとなるものは何か、互いに相手国が立場を理解し合うためにはどうすればよいかなどについて考えさせる」内容となっている。

以上見てきたように、府中小カリキュラムの内容は、「きんじょ」「わたしたちの日高町」「わたしたちの県」「わたしたちの生活を支える国土と産業」「世界の土地と暮らし」といった地理的内容、「日高町のうつりかわり」「郷土をひらく」「日本のあゆみ」といった歴史的内容、「町役場と町議会」「日本人の食生活と農業畜産業」「生活と政治」といった政治経済的内容とによって構成されていると言える。そして、これらの内容が「がっこう」「わたしたちのうち」「きんじょ」といった児童の生活圏から、「わたしたちの日高町」「わたしたちの県」「わたしたちの生活をささえる国土と産業」「日本のあゆみ」「世界の土地と人」というように町から県、国内、世界へと物理的空間的範囲を拡大しながら配列されていると言える。

こうした本カリキュラムに見られる内容と配列には、次のような特徴を指摘できる。第一に、社会事象を歴史的な視点で考えさせようとする内容の取扱いが見られることである。加えて、地域の将来を考えさせようとする内容の取扱いがみられることである。例えば、「きんじょ」「日本人の食生活と農業畜産業」といった地理的内容においても、「(近所の様子は)人々の願いで変わっていく」「日本の農業の特色を…(中略)…その歴史の変遷の中で考えさせる」というように歴史的な見方考え方を促すねらいが設定されている。また、「さまざまな土地の暮らし」では「それぞれの土地で生産と発展させ生活を切り開く努力がなされている」ことを、「自分たちの生活をふまえて」学んだ上で、「自分たちの地域をどうするのか」考えさせている。5年生「日本人

の食生活と農業畜産業」では、授業の最後に「農業の将来」を考えさせる扱い方となっている。第二に、地理的景観の変化や歴史的事象の背景には、生産や生活の向上、直面している問題の解決といった人々の願いがあるという社会や歴史に対する見方が、内容構成に見られることである。例えば、「交通の発達」では、「交通が今日のように発達してきた」背景には、「先人の様々な努力のあった」ことを理解させる内容構成となっている。「郷土をひらく」では「生産を高め、暮らしを守る民衆の願いと運動」があること、「日本のあゆみ」では「人々の生きるための願いと、その実現」が歴史を動かす原動力となっていることを理解させる内容の取扱いとなっている。第三に、物理的空間的範囲の順序性を超えて、児童の社会的視野を意図的に拡大しようとする内容選択が見られることである。例えば、2年生「山やうみではたらく人びと」では、「周囲の土地の様子や、仕事の特色を理解し、農業と比較して考えさせる」ために、遠足を利用して香住港まで見学に出かけている。3年生「町民の暮らし」でも、「他地域との結びつきについて考えさせる」ことが意図されており、生産や流通における他地域との関連が学習内容として選択されている。

## (2) カリキュラムに見られる教材

前述したように府中小カリキュラムには、学年、学期、月、単元名、ねらい、小単元名、到達目標に加えて、祖父母の話・記録、父母の話・記録、地域資料、見学場所、その他の資料が明記されている。6年生「世界の土地と人」を除いて、全ての単元に父母・祖父母を始めとする地域の方々、地域資料や地域の見学場所のいずれかが明記されているのである。

1年生「がっこう」には、学校の施設や設備、仕事内容について話す方等5人が登場する。見学場所は、運動場や体育館等10カ所示されている。その他の資料として「かかりのしごと」(読み物資料)等4つの資料が示されている。「わたしたちのうち」には専業農家のことや、季節に対応した牛飼いの仕事を話す方等9人の父母・祖父母が登場する。見学場所は、板金工場等8カ所示されている。その他の資料として、しごとしらべ表等17の資料が示されている。「きんじょ」には旧道の様子や、変わってきた町の様子について話す方等6人の父母・祖父母が

登場する。見学場所は、保育園等15カ所が示されている。その他の資料は、府中小の交通安全文集等3つが示されている。

2年生「田やはたけではたらく人びと」には、たばこ栽培や、養蚕について話す方等11人の父母・祖父母が登場する。見学場所は、たばこ畑等9カ所示されている。地域資料は古い道具等3つが示されている。その他の資料は、「のうかのくらし」（読み物資料）等11の資料が示されている。「山やうみではたらく人びと」には、炭焼きについて話す方が登場する。見学場所は、遠足で出かける香住港等4カ所が示されている。地域資料は「しんせきの人から聞いた話」、その他の資料としてチェーンソーの絵等5つの資料が示されている。「みせではたらく人びと」には昔の店や、A コープについて話す方等5人の父母・祖父母が登場する。見学場所は、電器店等3カ所が示されている。地域資料は、国府の絵地図等4つが示されている。その他の資料は、映像資料等4つが示されている。「こうばではたらく人びと」には昔の工場の様子や苦労を話す方等5人の父母・祖父母が登場する。見学場所は、日高メリヤス等5カ所が示されている。地域資料は、工場のパンフレット等3つが示されている。その他の資料は、見学した児童の絵と作文等2つが示されている。「のりものやうぶんのしごとをする人びと」には鉄道や郵便局の仕事について話す方等6人の父母・祖父母が登場する。見学場所は、国府駅等3カ所が示されている。地域資料は、副読本『ひだか』、その他の資料として「はいゆうびんです」（読み物資料）等5つが示されている。

3年生「わたしたちの日高町」には、芝の大木のことや八代川ショートカットについて話す方等8人の父母・祖父母が登場する。見学場所は、竹貫等の各地区15カ所が示されている。地域資料は、『国府村史』等14の資料が示されている。その他の資料は、「かわっていくほくの町」（読み物資料）等3つが示されている。「町民のくらし」には国府の農業の歴史や工場の仕事について話す方等11人の父母・祖父母が登場する。見学場所は、養蚕試験所等6カ所示されている。地域資料は、国府の工場で作られている製品等10示されている。その他の資料は、「おかあさんのないしょく」（読み物資料）等4つ示されている。「住みよい町へ」には上ノ郷地区における上下水道整備や国府の水害について話す方等9

人の父母・祖父母が登場する。見学場所は、上ノ郷のゴミ焼却場等3カ所が示されている。地域資料は、保健所のパンフレット等5つ示されている。その他の資料は、『わたしたちの憲法』等2つが示されている。「町役場と町議会」には通学路の安全施設整備運動や役場の仕事について話す方が登場する。見学場所は、道路の安全施設等3カ所が示されている。地域資料は、陳情書等3つが示されている。「日高町のうつりかわり」には子どもの頃の生活や学校の様子、戦時中の国府の様子を話す方等8人の父母・祖父母が登場する。地域資料は、学校のアルバム等5つ示されている。その他の資料は、明治・大正・昭和の風俗史等3つが示されている。

4年生「わたしたちの町」には、見学場所として水生城跡等3カ所が示されている。地域資料は、『日高町産業統計』等2つが示されている。「わたしたちの県」には、二人の祖父母が登場する。地域資料は、副読本『4年の社会 兵庫』等4つが示されている。その他の資料は、『日本子ども風土記 兵庫』が示されている。「さまざまな土地のくらし」には柳かごの歴史や、鞆産業について話す方等4人の父母・祖父母が登場する。見学場所は、鞆会館が示されている。地域資料は、『円山川』等5つが示されている。その他の資料は、『日本子ども風土記』等2つが示されている。「郷土をひろく」には神鍋遺跡や、首切り地蔵について話す方等6人の父母・祖父母が登場する。見学場所はたで川いせき等7カ所示されている。地域資料は、「生野代官所への嘆願書」等4つが示されている。その他の資料は、「ベロ出しチョンマ」（読み物資料）が示されている。「交通の発達」には円山川の舟運や、国府駅の歴史について話す方等10人の父母・祖父母が登場する。見学場所は、渡し跡等3カ所が示されている。地域資料は、「山陰街道湯島道中記」等2つが示されている。「くらしを守る」には、但馬と兵庫県の将来像について話す役場の方が登場する。その他の資料として、『生野イタイイタイ病』等3つが示されている。

5年生「わたしたちの生活をささえる国土と産業」には、地域資料として、『ポケット統計ひだか』等4つが示されている。その他の資料として、日本地図等7つが示されている。「日本人の食生活と農業畜産業」には、ビニールハウス栽培や農業の多角経営について話す方等12人の父母・祖父母が登場す



る。見学場所は、校区内の田畑や休耕田等5カ所が示されている。地域資料は、栽培暦等10示されている。その他の資料は、『朝日年鑑』等10示されている。「日本の森林と海洋」には、地域資料として『但馬の子ども作文集 香住漁業』等2つが示されている。その他の資料は、新聞切り抜き等5つが示されている。「日本の工業生産とそのつながり」には大工場の様子や、地場産業について話す方等7人の父母・祖父母が登場する。見学場所は、神戸製鋼等6カ所が示されている。地域資料は、国府の工場の資本、従業員数、原料、製品等を調査した物が示されている。その他の資料は、『明るい社会』等2つが示されている。「産業の発展とわたしたちの暮らし」には、開発や文化財保護について話す方が登場する。地域資料は、自然破壊に関する資料等7つが示されている。その他の資料は、映像資料「産業の発展と公害」等9つが示されている。

6年生「日本のあゆみ」には、たてぬい古墳と大昔の日高町、日高町の城、製糸工場と女工、農地改革について話す方等19人の父母・祖父母が登場する。見学場所は、日高町国分寺、上ノ郷山城跡等9カ所示されている。地域資料は、日高町の荘園、土居年貢嘆願書等18示されている。その他の資料は、魏志倭人伝、芋がゆの話等23示されている。「生活と政治」には、八代川ショートカット問題や農業問題を話す方等11人の父母・祖父母が登場する。見学場所は、八代川ショートカットが示されている。その他の資料は、『わたしたちの憲法』等4つが示されている。「平和への努力」には、息子を戦争でなくした方が登場する。その他の資料は、『ひろしま』等2つが示されている。

以上見てきたように、カリキュラムに登場する父母・祖父母は160人、見学場所は109カ所、地域資料は112、その他の資料は129となっている。本カリキュラムに見られるこれらの教材には、次のような特徴を指摘できる。第一に、遠足等の学校行事も活用しながら、町内はもとより遠隔地まで可能な限り現地見学を示していることである。例えば、2年生「山やうみではたらく人びと」では、「周囲の土地の様子や、仕事の特色を理解し、農業と比較して考えさせる」ために、「うみのしごと」については行商の方の仕事の見学、遠足で出かける香住港、佐津港、津居山港の見学が設定されている。第二に、登場する人々が話す内容、地域資料、見学場所等が関連付

けられていることである。例えば、3年生「町役場と町議会」では、「くらしを向上させ、豊かにしたいという願いは、町民の代表によって計画され、具体的に決められて、町役場を中心にして実行されることを理解」させるために、「くらしを向上させ、豊かにしたいという願い」の事例として、通学路の安全施設の充実に向けた学校、育友会、区長会の取り組みを校長先生が話している。そして、地域資料として町役場等へ提出した陳情書が用意され、通学路の安全施設・設備が見学場所として示されているのである。一方、「町民の代表によって計画され、具体的に決められて、町役場を中心にして実行される」仕事について役場の方が話している。そして、地域資料として町の広報、役場のパンフレットが用意され、役場、町議会、町民センターが見学場所として示されているのである。第三に、地域の人々の話や地域資料を補完する資料として、その他の資料が関連付けられていることである。また、その他の資料として、児童書や児童作文といった読み物資料、映像資料が用意され、学習内容に関する児童のイメージ形成を促進するものとなっていることである<sup>18)</sup>。例えば、5年生「日本人の食生活と農業畜産業」では、「日本の農業の特色を土地利用・生産技術の面から理解させ、農業生産と国民生活の関係や農民の願いを、その歴史の変遷の中で考えさせる」ために、農業の多角経営、専業農家の実態、ビニールハウス栽培や養牛・養蚕農家の様子、農業問題について12人の地域の人々が話している。そして、登場された人の生産現場が見学先として示されている。また、農業実態調査や農業人口、耕地面積、稲作の推移、生産高、家畜飼養の推移、養蚕の状況、作付け農作物の変化等の統計資料が地域資料として示されている。さらに、これらの地域資料に対応して、その他の資料-年鑑や地図帳等が示されている。すなわち日本の農業の特色を地域資料と全国的統計資料の両面から理解させようとしていることがわかる。加えて、「奈佐の農業」「尾崎の新田」『山芋詩集』といった読み物資料を使い、日本農業の現状と歴史をイメージ豊かに形成しようとしていると言える。



#### 4. 地域の人々の経験に学ぶ社会科カリキュラム編成の方法原理

##### (1) カリキュラム編成の過程と視点

前述したようなカリキュラムが編成されることになったのは、「年一回の祖父母の歴史に学ぶ会だけでなしに日常的な社会科の授業に登場してもらい、また、子どもたちが家をたずねておこなう見学学習に協力していただき、授業を成功」させようという、「楽しくわかる社会科の授業づくりを祖父母、父母の力を得てつくりだそうとする取り組みが各学年でおこってきた」からである<sup>19)</sup>。このような取り組みが起こってきたのは、父母・祖父母の話聞く中で、「国府地区に生き、汗して働き、喜び、悲しみ、ときには怒りながら生き抜いてきた人々の歴史を、子どもたちが胸をふるわせながら学んだ」からである<sup>20)</sup>。加えて、「地域の行事のなかに、地域の人の生き方、考え方がおり込まれていること。駅をつくるにも、土地改良をするにも、様々な矛盾があり、それをのりこえてきたこと。地域をきりひらいてきたのは、いま目の前にいる祖父母たちであり、民衆が地域の主人公であることを、実感として学んだ」からである<sup>21)</sup>。

そこで、「1974年にまとめた『地域に根ざす社会科教育』の実践」を「発展させて『祖父母・父母とともに創る社会科の授業』として、誰でも使えるカリキュラムづくり」を行ったのである<sup>22)</sup>。カリキュラム「編成の視点」は次のとおりである<sup>23)</sup>。

「①低学年では、地域の生産活動の現実を直接見せることを基本にきせいの教材にたよらず、地域の事実の内容を取材し、教材として再構成すること。

- a. 生産を中心に生活の現実をみつめる目を育て、その中で生まれてくるぎもんの芽を大切に育てること
- b. すなおな感動を大切にし、はたらく人々への共感を育てること
- c. 人権認識を低学年からきちんとおさえること（ものの見方の基礎）
- d. 歴史的なものの見方の下地をつくること（父母、祖父母の歴史）

②中学年の社会科は、地域学習そのものといってよい。子どもたちに地域を調べる自主性を育てながら、事実を発見し、追求することを基本に

次の視点でおさえる。

- a. 自分たちの地域学習を基礎に、地域による生活の多様性への目を開かせる。
- b. 地域の生産活動を直接体験することによって生産、労働への認識を育て、さまざまな疑問を育て地域を自らの手で調べる力を獲得させること
- c. 時代についての初歩的な認識を育てること
- d. 歴史を働く民衆の立場でとらえる力を育てること

③高学年では、日本の産業学習の総まとめと、日本の歴史、憲法学習のまとめが中心である。父母、祖父母の歴史や生産活動と学んだ認識とともに、日本の産業、日本の歴史の認識を形成することを基本とする。

- a. 祖父母、父母の歴史や体験に学び、わかる授業、感動のある授業を構成すること
- b. たしかな社会認識を地域学習を基礎に獲得させること
- c. 祖父母、父母の歴史や体験を学ぶ授業は、たしかな認識と同時に生きる力と結びついた学力を形成すること
- d. 憲法学習は、人権認識の総仕上げとして重視し、祖父母、父母の体験に学び、たてまえ論ではなく、現実を生きていく力としての憲法認識を形成すること

すなわち、父母・祖父母の歴史体験や社会経験を学び、児童に歴史や社会に対する認識形成を図るとともに生きる力を育成すること、生活や生産の取り組みによって社会に関与する父母・祖父母に学び人間を主体とした社会認識を形成すること、基本的人権の尊重など憲法の精神にそった価値観形成を図ることを可能とする学習内容を選択し、編成しようとしたと言える。なぜなら、社会は「おじいさん、おばあさん、そのまたおじいさん、おばあさんの昔から労働によって築かれてきた」のであり、「こうした人々の生きて働く上に成り立っている」からである<sup>24)</sup>。したがって、「社会の勉強とは、いっしょうけんめい働いている本当の姿、現実の姿を見たり考えたりすること」であり、「社会科の勉強のものは学校や教科書にあるのではなく、国府に生きるわたしたちのくらしの中に、国府の地域の中にいっぱいある」のである<sup>25)</sup>。だから、「社会科の学習を教室の中に閉じこめないで子どもたちの目を輝かせる生

きた材料のいっぱいある国府の地域へどんどんでかけ「地域を見学したり、働いている人たちのようすの話を聞いたり、つまり、子どもたちが自分の体の五感を働かせて地域を深く調べようというところから始まる」学習にしたいと考えられているのである<sup>26)</sup>。それは、「先生から教えこまれたことではなく、自分の目でつかんだ事実から生まれる発見のおどろき感動が子どもたちの生き生きとした学習に連がり、社会が大好きでたまらんとする子が育ち、この学習へ自覚を生み出すことはまちがいない」からである<sup>27)</sup>。このような学習から「働くことに目を向ける子ども、物事をしっかりと見つめる子ども、自分の頭で考える子、目を社会に向ける子ども」が育ち、「郷土を知ることは、わが郷土を愛する心と同時に日本、世界へと社会を見る目を広げることにつながる」と考えられていたからである<sup>28)</sup>。

したがって、「日高町のうつりかわり」「郷土をひらく」といった父母・祖父母の生きてきた歴史を学ぶ単元、「かわっていく農業」「かばんの町 豊岡」といった父母・祖父母の労働を学ぶ単元、「町役場と町議会」「近代日本へのあゆみ」といった生活や生産の向上を求める取り組みを学ぶ単元がカリキュラムに設定されているのである。そして、それらの学習内容を、児童が「自分の目、耳、口、足を動かしてつかみ考えることのできる」ように、関連する「祖父母の話・記録」「父母の話・記録」「地域資料」「見学場所」「その他の資料」といった教材群がカリキュラムに明示されているのである<sup>29)</sup>。

カリキュラムの編成方法は、「今まで、祖父母の歴史に学ぶ会に参加いただけた方々や見学学習をお願いしている方々の名前を書き込んだカリキュラムをつくり、全家庭に配布」している<sup>30)</sup>。配布に当たっては、「社会科学習協力のご依頼」という手紙も添えられている。そして、「老人会と全職員の懇談会」「第6回子どもを育てる会」でカリキュラムに関する話し合いが行われている<sup>31)</sup>。こうした方法が取られたのは、「この学習だったら私が話してやろうという積極的な祖父母・父母の提案を組み込んで、さらに充実したものになりたい」と考えたからである<sup>32)</sup>。「老人会と全職員の懇談会」では、『カリキュラムという英語は何のことですかいな』からはじまり、『3年のこの勉強ではわしが出る方がいい』『ここではOさんに出てもらおう』などカリキュラムの検討が始まり、さらに持ち帰り地区ごとに老人

会を開いて、みんなの運動にしようということになった」のである<sup>33)</sup>。すなわち、父母・祖父母が自身の社会経験や歴史体験、専門的知見と学習内容を吟味し、参加する単元を決定しているのである。府中小社会科カリキュラムは、父母・祖父母を始めとする地域住民の主体的な参加のもとで編成され、実施されたと言える。

## (2) カリキュラムの実施と修正

前述したように1974年にまとめられた「地域に根ざす社会科教育」は、本カリキュラム編成の土台となっている。この研究をとおして、地域と結ぶ社会科教育の視点が、次のようにまとめられている<sup>34)</sup>。

- 「①地域の歴史を自分の問題として意識する。そこから、自分の郷土の未来への見通しを持った子どもを育てよう。
- ②具体的、現実的な資料をもとに、科学的認識の基礎を育てよう。そのために、見学、フィールドワーク、祖父母・父母の話を教材化しよう。
- ③“なぜか” “どうしてか” 問題意識を持って主体的に地域の生産や歴史を見学しよう。
- ④地域の人々、祖父母・父母の授業参加を求め、ともに学び合う学習を組織しよう」

そして、授業研究の結果、次のような課題や教訓を導き出している<sup>35)</sup>。例えば、2年生「のうかのしごと」の実践では、「①生産を中心に、生活の現実をみつめる目を育て、その中で生まれてくる疑問の目を大切に育ててやること。②すなおな感動を大切に、働く人々への愛情を育てること。③人権意識を低学年からきちんとおさえること（ものの見方の基本）④歴史的なみかたの下地をつくること（祖父母、父母の子どもころ。民話）」が指摘されている。4年生「郷土をひらく」では、「①自分たちの地域学習を基礎に、地域による生活の多様性へ目を開かせること。②時代について初歩的な認識を育てること。③歴史を働く農民の立場で、実感的、生活的にとらえさせること」が指摘されている。5年生「これからの農業」では、「①農業の発展過程（歴史）をどこで教えるか。②日本の農業の課題や現状を教師自身がどうつかんでいるか。③社会を科学的に認識する力をどう系統だてて育てていくか。④事象を法則化するための資料の与え方をどうするか」が指摘されている。

すなわち、その後のカリキュラム編成の視点とな

る教訓を、授業実践をとおして導き出していることがわかる。そして、こうした経験が「地域に根ざす教育の実践を進展していく」という府中小の「学校経営の基本的態度」として確立され、地域の歴史、労働、文化等を視野に入れて、授業実践はもとより、カリキュラム編成に結実していったと言える<sup>36)</sup>。

1979年には、「父母・祖父母と創る社会科カリキュラムを完成し、父母・祖父母の教育力を授業にどう汲み入れ、どう生かしていくのかを明らかにする」が職員研修の基本方針としてされている。そして、以下のような授業実践が展開されている<sup>37)</sup>。

- 【1年】「わたしのうち」「おかあさんのしごと」
- 【3年】「わたしたちの日高町—わたしたちの国府」  
「日高町100年のうつりかわり」
- 【4年】「かばんとやなぎの町・豊岡」
- 【5年】「日本の工業—近代工業へのあゆみ」
- 【6年】「15年戦争」

これらの授業実践をとおして、次のような教訓と課題を導き出している<sup>38)</sup>。

- a. 感動を持って学ぶ。体を通して、祖父母の歴史や父母の労働を自分のものにしていった。
- b. 身近な地域と日本を結ぶ学習の中で、自らの問題として受けとめる子どもが育ちはじめた。
- c. こうした学習は、子どもたちの歴史への関心をわきたたせ、自ら調べる子どもたちが多くなってきた。
- d. 祖父母の歴史、父母の労働への共感と人間への信頼、祖父母、父母への尊敬の念を育てていった。
- e. 祖父母、父母の生き方に共感することはとりもなおさず、科学的な認識と、生きる力の結合である。
- f. 祖父母、父母の教育力は、こうした学習を通して一段と明らかにされ、地域を子ども、教師とともに考えることが可能となった。
- g. 祖父母と子ども達の日常的な交流がはじまった。(手紙のやりとり)
- h. 教師の作った科学的で典型的な資料が、祖父母や父母の話により科学性を与え質の高い授業が可能になる。
- i. 低学年でも、事前学習が重要である。何を見、何を聞くのか。ここがしっかりしてないと祖父母の話が生かされてこない]

すなわち、父母・祖父母の歴史体験や社会経験の持つ教育力を再認識するとともに学習指導における教師の果たすべき役割を再確認したと言える。1980年度には、学習指導要領の改訂に伴い、こうした経験を反映させたカリキュラムの再編成が行われている。

## 5. おわりに

本小論では、地域に根ざした社会科カリキュラム開発の示唆を得るため、兵庫県日高町立府中小学校(当時)の社会科カリキュラムを取り上げ、カリキュラム編成の方法原理を考察してきた。府中小カリキュラムは、父母・祖父母の歴史体験や社会経験を学び、児童に歴史や社会に対する認識形成を図るとともに生きる力を育成すること、生活や生産の取り組みによって社会に関与する父母・祖父母に学び人間を主体とした社会認識を形成すること、基本的人権の尊重など憲法の精神にそった価値観形成を図ることを可能とする学習内容を編成していた。そして、それらの学習内容を、児童が「自分の目、耳、口、足を動かしてつかみ考えることのできる」ように、関連する父母・祖父母の話、見学場所といった教材群がカリキュラムに明示されていたのである<sup>39)</sup>。父母・祖父母の話の選択にあたっては、父母・祖父母が自身の社会経験や歴史体験、専門的知見と学習内容を吟味し、参加する単元を決定していたのである。本研究は、編成理論や編成手続き、授業研究を基礎にカリキュラム開発を進める方法等、府中小カリキュラムに内在する編成方法原理を明らかにしたところに意義が認められる。今後の課題は、本研究で解明した編成理論、編成手続き等にもとづいて、地域に根ざした社会科カリキュラムを編成することである。

### 【註】

- 1) 安彦忠彦編『カリキュラム研究入門』勁草書房、1985年、p. i.
- 2) 田中耕治「教育課程(カリキュラム)とは何か」田中耕治編『よくわかる教育課程』ミネルバ書房、2011年、p. 2.
- 3) 川口広美「『カリキュラム研究』からみた社会科研究の特質と課題—2000年-2011年掲載論文の検討をもとに—」全国社会科教育学会『社会科教育論叢』第48集、2012年、pp. 37-46.
- 4) 同上論文、p. 37.
- 5) 日高町は、2005年豊岡市と合併した。府中小学校は、



- 豊岡市立府中小学校となっている。当時の府中小学校の実践が紹介されている主な文献は、以下のとおりである。
- ① 森垣修『地域に根ざす学校づくり』国土社, 1979年。
  - ② 森垣修「教職員集団とともに父母が参加し支える学校づくり」教育実践事典刊行委員会編『教育実践事典 第5巻 地域に根ざす教育実践』労働旬報社, 1982年10月, pp.160-190。
  - ③ 村山士郎・久富善之・佐貫浩編著『学校の再生1 兵庫県府中小学校に学ぶ』労働旬報社, 1984年, pp.57-66。なお、調査報告書は、次の雑誌にも発表されている。『教育』No.412, 国土社, 1982年。
  - ④ 神戸大学 斎藤研究室・土屋研究室『子育てと教育を地域に根ざして—府中小の教育実践に学ぶ—』1984年, pp.47-53。
  - ⑤ 千葉大学大学院社会教育学研究室『府中小の実践に学ぶ』1985年。
- 6) 校内研修「地域と結ぶ社会科の授業」は1973年度1974年度の2年間にわたって取り組まれている。「祖父母の歴史に学ぶ会」は、1973年7月に「教育の思い出を語る会」として始まった。第2回から「祖父母の歴史に学ぶ会」として2013年まで毎年開催されている。
  - 7) それぞれガリ版刷り、わら半紙18枚綴りとなっている。1980年度の改訂は、学習指導要領の改訂に伴う内容、単元配列の修正、到達目標の修正、地域資料の入れ替え等が行われている。
  - 8) 佐藤は、「授業研究を基礎にカリキュラム開発を推進する立場」から、「カリキュラムと授業の二元性を克服すること、開発と実践のダイナミズムを形成することにとどまらず、教育制度の質を問うことでもあり、学校と教師の自由と自律性を求めることともなっている」と述べている。佐藤学「カリキュラム開発と授業研究」安彦忠彦『カリキュラム研究入門』勁草書房, 1985年, pp.88-122。
  - 9) 川口広美, 前掲 3), p.44。
  - 10) 文部科学省『小学校学習指導要領』東京書籍, 平成20年, p.41。
  - 11) 文部科学省『小学校学習指導要領解説 社会編』東洋館出版社, 平成20年, p.100。
  - 12) 村山士郎・久富善之・佐貫浩, 前掲 5) ③, 村山士郎「父母・祖父母とつくる社会科カリキュラム」pp.57-66。
  - 13) 同上, p.66。
  - 14) 神戸大学 斎藤研究室・土屋研究室, 前掲 5) ④, pp.47-53。
  - 15) 同上, p.52。
  - 16) 府中小学校『父母・祖父母とつくる社会科カリキュラム』昭和53年10月。
  - 17) 紙幅の関係から、「3. 地域の人々の経験に学ぶ社会科カリキュラムの構成」における引用は、特に断らない限り1978年度版カリキュラムからの引用である。
  - 18) その他の資料で示されている読み物資料は54、映像資料は24となっている。
  - 19) 正木喜美子『第28次兵教組城崎支部教育研究集会 父母、祖父母とともに創る社会科の授業』1978年, p.3。
  - 20) 森垣修「土地改良・米づくりの授業—社会認識を育てるために—」歴史教育者協議会『歴史地理教育』No.325, 1981年9月, p.24。
  - 21) 同上。
  - 22) 正木喜美子, 前掲報告書18), p.4。
  - 23) 同上報告書, p.5。
  - 24) 府中小学校『第6回 子どもを育てる会 父母、祖父母とともに創る社会科の授業』1978年10月28日, p.5。
  - 25) 同上資料, p.6。
  - 26) 同上。
  - 27) 同上。
  - 28) 同上資料, p.4。
  - 29) 「老人会と全職員の懇談会」は1978年10月23日、「第6回子どもを育てる会」は、1978年10月28日に行われている。
  - 30) 府中小学校, 前掲24), p.4。
  - 31) 森垣修「祖父母・父母とともにつくる社会科」歴史教育者協議会『歴史地理教育』No.291, 1979年5月, pp.65-66。
  - 32) 黒川八重子『日教組第24次 日高教第21次 教育研究全国集会報告書 地域父母と結ぶ教育運動』1975年, p.3。
  - 33) 同上報告書, pp.4-7。
  - 34) 府中小学校『昭和51年度 学校要覧』, p.8。なお、この「学校経営の基本的態度」には、次のように書かれている。  
「子どもは、地域社会の自然と社会の歴史を生かしながらその中で育てられるべきである。地域社会に生きる子どもと父母をはじめとする郷土の人々の在り方を究明することにより、地域社会の実態の上に将来の展望が導き出され、必然的に教育課題が提案される。…(中略)…「地域に根ざす」とは、地域を大事にしていく過程の中で、①地域の文化的伝統の再発見をする。②地域の教育力の組織化をすすめる。③地域を愛するところを育てる。④地域の発展に対して協力する。ことである」また、この時には、同和教育計画の一環として「社会科を中心とした教育計画」もつくられている。
  - 35) 黒川八重子『第24次城崎支部教育研究集会報告書 地域父母と結ぶ教育運動』1974年, pp.5-7。
  - 36) 兵庫県城崎郡日高町立府中小学校『昭和51年度 学校要覧』p.8。
  - 37) 兵庫県城崎郡日高町立府中小学校『昭和54年度 学校要覧』p.11。
  - 38) 正木喜美子『第28次兵教祖城崎支部教育研究集会報告書 父母・祖父母とともに創る社会科の授業』1978年, p.7。
  - 39) 府中小学校, 前掲 24), p.4。
- 本研究をまとめるにあたって、元兵庫県日高町立静修小学校教諭(当時)故森垣修氏にはたくさんの資料を提供していただくなど、多大なご協力をいただきました。記して感謝いたします。